

みちのく

岡本かの子

青空文庫

桐きりの花の咲さく時分であつた。私は東北のSという城下町の表通りから二側目ふたかわめの町並まちなみを歩いてゐた。案内する人は土地の有志三四名と宿屋の番頭であつた。一行はいま私が講演した会場の寺院の山門を出て、町の名所となつてゐる大河に臨み城跡しろあとの山へ向うところである。その山は青葉に包まれて昼も杜ほととぎす鶉うすが鳴くという話である。

私はいつも講演のあとで覚える、もつと話し続けたいような、また一役済ましてほつとしたような——緊きんちよう張ぬの脱ぬけ切らぬ氣持で人々に混こつて行つた。青く凝こつて澄すんだ東北特有の初夏の空の下に町家は黝くろんで、不揃ふぞろいに並ならんでゐた。廂ひさしを長く突出つきだした低

いがつしりした二階家では窓から座敷ざしきに積まれているらしい繭まゆの山の尖さきが白く覗のぞかれた。

「近在はるごで春蚕はるごのあがったのを買集めているところです」

有志の一人は説明した。どこからかそら豆ゆでを茹ゆる青い匂においがした。古風な紅白の棒の看板を立てた理髪店りはつてんがある。妖艶ようえんな柳やなぎが地上にとどくまで枝垂しだれている。それから五六軒けん置いて錆朽さびくちた洋館作りの写真館つまじが在る。軒のきにちよつとした装飾そうしよくをつけた陳ちんれ列窓つまじが私の足を引きとめた。

緊張の気分もやつと除とれた私は、どこの土地へ行つても起るその土地の好みの服装ふくそうとか美人とかいうのはどうい風のものであろうかと、いつもの好奇心こうきしんが湧わいて来た。

窓の中の写真は、都会風を模した、土地の上流階級の夫人、髯ひげ自慢げじまんらしい老紳士ろうしんし、あやしい洋装ようそうをした芸妓げいぎ、ぎごちない新婚しんこん夫妻の記念写真、手をつないでいる女学生——大体、こういう地方の町の写真館で見ると大差はないが、切れ目のはつきりした涼すずしい眼めつきだけは撮うつされている男女に共通のものがあつてこの土地の人の風貌ふうぼうを特色づけていた。

だが、私が異様に思ったのは、それらに囲はまれて中央に貼はつてある少年の大きな写真である。写真それ自体がかなり旧式きゅうしきのものを更さらに年ふるしたせいもあるだろうが、それにしても少年の大よおほうで豊かゆたかでそして何か異様なものが写真面に表あらわれているののに心がうたれた。

少年はいい絹ものらしい着物を無造作に着て、眼鼻立ちめはなだの揃った顔を自然に放置していた。いくら写真を撮し慣れた人でも、これくらい写真機に対して自然に撮させた顔も尠すくなからう。

私が思わず硝子ガラス近く寄って、つくづく眺め入るのを見て、有志の一人は側そばに来て言った。

「それは、東北地方では有名だった四郎馬鹿しろうばかの写真です」

「白痴はくちなのですか、これが」私は訊ね返した。

「白痴ですが、普通ふつうの馬鹿とは大分違っておりました、みんなにとても大事にされました」

そして、これも遠来の講演者に対する馳走ちそとうとでも思ったように四郎馬鹿について話してくれた。

汽車の係員たちまでがこの白痴の少年には好意を寄せて無賃で乗車さす任意の扱あつかいが出来たというから東北の鉄道も私設時代の明治四十年以前であろう。この町に忽こっぜん然として姿の見すばらしい少年が現われた。

少年は、見当り次第の商家の前に来て、その辺にある箒ほうきを持って店先を掃はくのである。その必要のある季節には綺麗きれいに水を撒まくのである。そうしたあと、少年はにこにこして店の前に立って何かを待つ様子である。

始めは何事か判わからなかつた店の者は余計なことをすると思つて、少年の所作を途とちゆう中さまたで妨さまたげたり、店先に立つ段になると叱しかつて追

い放つたりした。少年は情ない顔をして逃げ去る。ときどきは心ない下男に打たれて泣き喚きながら走つたりした。

けれども少年はしばらくすると機嫌を取直す。というよりも芥を永く溜めてはおけない流水のように、新鮮で晴やかな顔がすぐ後から生れ出て晴やかな顔つきになる。そしてもう別の店の前を掃くのであつた。

「性質のいい乞食なのだ。一飯の恵みに与りたいのだ」

そう受取るようになった店々のものは、掃除をしたあとで立つ少年を台所の片隅に導いて食事をさせた。少年はなぜこれが早く判らなかつたのだらうという顔つきをして、嬉しそうに箸を取り上げる。

少年には卑屈ひくつの態度は少しも見えなかった。

食事の態度は行儀ぎようぎよく慎ましかつた。少年はたっぷり食べた。

「お雑作でがんした」礼もちやんと言った。店の忙いそがしいときや、

面倒めんどうなときに、家のものは飯を握にぎり飯にしたり、または紙に載の

せて店先から与あたえようとした。すると少年は苦痛な顔をして受取

りもせず、踵きびすを返してすごすごと他の店先へ掃きに行つた。坐すわつ

て膳ぜんに向うのでなければ少年は食事と思わなかった。

少年は錢も受取らなかつた。錢は貰もらつたこともあるが大たい概がい忘

れて紛ふんしつ失するので懲こりたらしい。

「あれは、どこか素すじよう性のいい家に生れた白痴なのだ」

「そう言えば、上品だ」

町の人は、少年自身がわずかに記憶きおくしている四郎という名を聞き取つて四郎馬鹿と言つたが、四郎馬鹿さんと愛称をもつて呼ぶようになった。

「四郎馬鹿さんに見舞みまわれた店はどうも繁はんじょう昌しょうするようだ」

東北の町々にこういう風評が立つた。だいぶ以前から四郎は、最初出現したS——の城下町にも飽あいて、五六里距へだたつた新興の市へ遊びに行つた。誰だれか物好きに荷馬車にでも乗せて連れて行つたらしい。それから少年は町から町へ漂ひょうはく泊はくすることを覚えた。汽車にも乗せた人があるらしい。奥羽おうう、北国の町にも彼かれの放浪ほうろうの範囲はんいは拡張された。それらの町々でも少年の所作に変わりはない

つた。店先の掃除そうじをして一飯の雑作ざうさくに有りついた。誤解ごかいや面倒めんどうが
 る関門かんもんを乗り越こして四郎の明澄性めいちようせいはそれらの町々の人の心こころを
 も捉とらえた。

「四郎馬鹿さんに見舞みまわれた店は、どうも繁昌はんしょうするようだ」

それには多分に迷信性めいしんせいと流行性りゅうせいがあつたかも知れない。しかし
 少年の一点の僻ひがみも屈くつ託たくもない顔つきと行雲流水ぎんうんりゅうすいのような行動
 とは人々の心に何か気分を転換てんかんさせ、生活に張氣ちやうきを起させる容
 易やすなものがあつたらしい。マスコツトというものはそうしたもの
 である。

町々の人は少年を歡迎かんげいし始めた。少年の姿を見ると目出度めでたい
 と言つて急いで羽織袴はおりはかまで恭やうやうしく出迎でむかえるような商家の主人めいしゆもあ

つた。華々はなばなしい行列で停車場へ送ったりした。少年の姿は絹物の美々しいものになった。町の有力者は言った。

「あの白痴を呼んで来るのは町の景気引立策にもいいですなあ」

北国寄りのF——町の表通りに、さまで大きくはないがしつかりした呉服店ごふくてんの老舗しにせがあつた。お蘭らんという娘むすめがあつた。四郎はこの娘が好きでF——町へ来ると、きつとこの呉服店へ立寄つた。四郎はお蘭の傍そばに居るだけで満足した。お蘭の針仕事をしている傍ひざに膝ひざをゆるめて坐つて、あどけないことを訊たずねたり単純な遊あそびごとをしたりした。小春日和こはるびよりの暖かい日にはうとうと居眠いねむりをした。ときに眼を覚まして、そこにお蘭のいるのを確かめると、また

安心して^{まぶた}瞼をゆるめた。

お蘭は、世の中の雑音には極めて^{おび}怖え易く^{やす}唯一人^{ただ}、自分だけ静な安らかな瞳^{ひとみ}を見せる野禽^{のどり}のような四郎をいじらしく思った。彼^かの^{のじよ}女はこの人並でないものに何かと^{いたわ}労りの心を配ってやった。それは母か姉のような気持だった。こうしているうちに一つの懸念^{けねん}がお蘭の心に^{うか}浮んだ。あるとき彼女は四郎にこう^き訊いた。

「もし、あたしがお嫁^{よめ}に行くとき、四郎さはどうする」

四郎は^{ちゆうちよ}躊躇なく答えた。

「おらも行くだ、一^{いっしょ}緒に」

お蘭は転げるように笑った。

「そんなこと出来ないわ。人を連れて嫁に行くなんて」

四郎には判らなかつた。

「どうしてだ」

「お嫁に行くといふことは私が向うの人のものになつてしまふのだから、その人が承知してくれないじゃ、一緒に行けないのよ」

「お蘭さが誰かのものになるといふだかね」

「そうよ」

「ふーむ」

白痴の心にもお蘭が自分から失われ、自分は全く孤立無援こりつむえんで世の中に立つ侘わびしさがひしひしと感あじられた。現あわれて来る眼に見えぬ敵を想像して周章あてはてた。

「お蘭さ、嫁に行つちやいけねえ」

「そんなこと無理よ」

四郎は悲しい顔をして考え込んでいたが、もつともらしい大人の真似まねをして膝を打った。

「それええだ、おらお蘭さ嫁に貰うべえ」

お蘭は呆あきれた。けれどもこう答えた。

「四郎さが私をお嫁に貰ってくれるの。こりや偉えらいわねえ」

「おら貰うべえ」四郎は得意な顔つきをした。

「けれども四郎さ。あんたが私をお嫁に貰うには、もつと立派な賢かしこい人にならないじゃ——ねえ、判わかって」

お蘭に取って、この言葉は一時凌いちじしぎの気休めであり、また四郎への励はげましに使ったものに過ぎないけれども、四郎は永く忘れ

なかつた。彼の心は七八つの幼ないものだが年齢はもう十六七の青年に達していた。

夏はさ中にも近づいたが山の傾斜にさしかかつて建て連らねられたF——町は南の山から風が北海に吹き抜けるので熱気の割合に涼しかった。果樹園や畑の見えるだらだら下りの裾野平の果に、小唄で名高いY——山の山裾が見え、夏霞がうつすり籠めていゝる中に浪がきらりきらり光つた。刈り取つて乾してある熟麦の匂いがした。

それらが縁側から見える中座敷でお蘭は帷子の仕つけ糸を
除つていた。表の町通りにわあわあいう声がして、それが店の先

で纏まとると、四郎が入つて来た。

四郎はお蘭の前に来ると、お蘭が何とか言つてくれるまでぶすつとして黙だまつて立つているのがいつもの癖くせであつた。それがこの白痴に取つてせいぜい甘あまえた態度だつた。それが面白いのでお蘭はなるたけ気がつかぬ振ふりをしてうつ向むかひている。

だが、やがて振ふり仰あおいだときにお蘭はびっくりして叫さけんだ。

「何ですnee、四郎さんは。そんなおかしな服装なりをして」

四郎は赤い羽織に大黒さまのような頭巾ずきんを冠かぶつていた。

「おら、嫌いやだと言つただけけれど、みんなが無理に着せるんだよ」

四郎はお蘭の怒いかりに怯おびえながら言つた。

「すぐお脱ぬぎなさい」

お蘭は手伝つて四郎からそのおかしなものを取り去つてやった。

「白痴だと思つてこの子を玩弄物おもちゃにするにも程がある」

すると四郎は、

「白痴だと思つて——この子を——玩弄物にするにも程がある」

とおずおず口移しに真似まねて言つた。不断、お蘭のいうことはす

べて賢い言葉だと思つて、口移しに真似て見るのが四郎の癖であ

つた。日頃ひごろはそれも愛あい嬌きょうに思えたが、今日はお蘭には悲しか

つた。お蘭は冷水しみずで絞しぼつた手拭てぬぐいを持って来てやつたり、有り合

せの蕨餅わらびもちに砂糖をかけて出してやつたりした。

四郎は怯えも取れて、いつものようにお蘭の側に坐つてどこか

で貰つて来た絵本を拡ひろげてお蘭の説明を訊くのであつた。お蘭は

仕事をしながら説明をしてやる。

「これなんだね」

「鉄道馬車」

「これなんだね」

「お勤め人、洋服を着て鞆かばん持って」

四郎はその絵姿をつくづく眺めていたが、やがて言った。

「おら、もうじき洋服を着るだよ」

お蘭は、これがただの四郎の空想だと思った。

「それはいいわね」

四郎は得意になった。

「おら唄うたうたって、踊りおどるだよ」

お蘭は少々訝しく思えて来た。

「どこでよ、どうしてよ」

「そして、伶俐りこうになって、お蘭さ嫁に貰いに来るだよ」

お蘭はふと、近頃人の噂うわさでは四郎の人気につけ込んで興行師がこの白痴の少年に目をつけ出したということを思い出した。これは只事ただごとではない。

「駄目だめよ、駄目よ、四郎さん。そんなことしちや」

けれども四郎はいつもの通りにはお蘭のいうことを聴きき入れなかつた。

「よつぽど伶俐りこうにならなけりや、おらに、お蘭さ嫁に來めえ」
そういうと四郎はふいと立って出て行ってしまった。

洋服を着て派手な舞台はでぶたいに立つことと嫁を貰う資格とを無理に結びつけて誰かがこの白痴の少年の心に深々と染み込ませたものらしい。

四郎がお蘭のところへ来なくなつて、この白痴の少年が金モールの服をつけ曲馬の間に舞台に現れて、唄をうたい踊りを踊つたのち、真しんちゆう鍬くわの小判だの肖像しょうぞう入いりの黄財布だのを福の縁起えんぎだといつて見物に売るといふ噂を耳にした、お蘭は立つても居てもいられなかつた。片親の父に相談してみても物ものがた堅い老舗の老主人は、そんな赤の他人の白痴などに関かまつても仕方がないと言つて諦めあきらさせられるだけだつた。

冬が来て春が来た。四郎の人氣はだんだん落ちて、この頃では、おしろい白粉や紅を塗ぬつて田舎芝居いなかしばいで散々愚弄ぐろうされる敵かたきやく役に使われ
ているという風評になった。お蘭は身を切られるように思いなが
らじつとその噂を聞いた。四郎がたとえこの町へ帰つて来てもど
うなるものではない。馬鹿を伶俐れいにしてやる事が出来るという
でもないがしかしとにかく、早く帰つて来て欲しいと神仏きせいへ祈請きせい
もした。

また幾いくつかの春秋が過ぎた。四郎の噂は聞かれなくなった。

父親は死んで、お蘭は家を背負おわなければならなかった。生前
に父親も親しんせき戚むこも婿むこをとるようかなりお蘭を責めたものだが、こ
ればかりはお蘭は諾うべなわなかった。四郎が伝え聞いたらどんなに落ら

胆くたんするであろう。この心理がお蘭には自分ながらはつきり判らなかつた。お蘭の玉の緒おを、いつあの白痴が曳ひいて行つたか、自分が婿を貰い、世の常の女の女の定道に入るとすれば、この世のどこかの隅であるの白痴が潰ついえ崩くずれてしまうような傷いたましさを、お蘭の心がしきりに感ずるのをどうしようもなかつた。

北海の浪の吼ほゆる日、お蘭は、四郎が今は北海道までさすらつて興行の雑役に追い使われているということ聞いた。

いつか婚期を失つてしまつたお蘭は自分自身を諦め切つて、
気持ともなに伴つて、もはや四郎を生ける人としては期待しなくなつた。

私はこの話を昼も杜鵑の鳴く青葉の山へ行つても、晩のかんげい歓迎

会かいの席でも、また宿屋へ帰つても古いことを知つてそんな年寄りを見つけると、訊ねて聞き取つたのである。歓迎会で会つた老婦人の一人は言つた。

「お蘭さんは、まだ生きています。××蘭子と言
うのです。何なら尋ねてたずご覧遊ばせ。F——町はちようど講演に
お廻りまわになる町でもございましょう」

私が尋ねるまでもなく私がF——町へ入ると、停車場へ出迎
えた婦人連の中にお蘭を見出した。白髪はくはつの上品な老婦人で耳もか
なり遠いらしく腰こしも曲つている。だが、もつと悲劇的な憂ゆう愁しゆう
を湛たたえた人柄ひとがらを想像していたのに、極めて快活ひようきで人には

軽らしいところを見せ、出迎えの連中の中での花形になつていた。

私は河鹿の鳴く溪流に沿った町の入口の片側町を、この老婦人も共に二三人と自動車で乗り上げて行つた。なるほど左手に裾野平が見え、Y山の崖の根ぶちに北海の浪がきらきら光つてゐる。私は同席の人もあるので、どうかと思つたがお蘭老婦人のあまりに快潤な様子に安心して訊いてみた。

私がたずねようとした四郎という白痴の少年の名だけを聞き取つた彼女はすぐこう言つた。

「一時は四郎も死んだことにして思い諦めましたが、なにしろ自分より六つ七つ若いのですからまだ生きてゐるかも知れません。

もし四郎が帰つて来たらいた勞わつて迎えてやる積りです。こう心を定めてから、氣持はだいぶ楽になりました」

だから一時こしら拵えた四郎の位牌いはいも何もかも捨ててしまつて、折につけ四郎の消息を探ることにしていると、お蘭老女は語つた。

私は、不思議な人情を潜くぐつた老女の顔かに影かげのように浮うく薄うす白しろいような希望のいろを、しみじみと眺ながめた。そして一人の女性にこうまで深く染み通らせた白痴少年の一本気をも想おもつてみた。その夜、客となつた長者の家の奥座敷で食事後休んでしていると、お蘭老女が尋ねて来た。そして話の途絶えた間、北海の浪の音を聞いていると、私はこの老婦人と一緒に永遠に四郎を待つ氣持になれた。鳥賊いかつり船の灯が見え始めた。

(昭和十二年十月)

青空文庫情報

底本：「ちくま日本文学全集 岡本かの子」筑摩書房

1992（平成4）年2月20日第1刷発行

底本の親本：「岡本かの子全集 第四卷」冬樹社

1974（昭和49）年3月18日

初出：「雄弁」

1938（昭和13）年9月

入力：ささぶ

校正：しず

1999年3月20日公開

2016年2月3日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

みちのく

岡本かの子

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>